

# 「阪神高速 未来へのチャレンジプロジェクト」 第4回助成・事業実施報告書

## 1. 基本事項

団 体 名	L F I C (The Lab of Future Innovators and Creators)		
事 業 名 称	未利用農産物で生産者と消費者をつなぐ 「キャリア教育×6次産業化」	助成額	50万円
申請事業の概要	子どもたちが農家の指導のもと農産物の栽培に取り組み、プロのデザイナー指導のもと商品のパッケージデザインまで関わり、地域で「こどもマルシェ」等の販売も体験する		
申請事業の目的	<p>◆「次世代の担う人づくり」の分野に照らした目的と期待できる成果</p> <p>①農業(1次産業)の6次産業化という、地域社会との共同プロジェクトを通じ、社会と接続しながら実践的に学ぶことができます。(挑戦意欲向上、生きる力向上)</p> <p>②1次産業・2次産業・3次産業でそれぞれプロとして活躍する社会人と一緒にプロジェクトを行うことで、自分らしい人生の選択を促進します。(キャリアプランニング能力習得、自己肯定感向上)</p> <p>③教科学習の知識を社会に出た時にどう活かし合うのかを体験できる機会を得ることで、学ぶ意義や、学習意欲の向上につながります。(学校生活の充実、生活改善、社会人基礎力向上)</p>		
関連するSDGs目標	メイン》 ■目標4 ■目標9 ■目標12 サブ》 ■目標11 ■目標13 ■目標15		

## 2. 助成事業の実績・成果等について

2025年1月～3月

プロジェクトメンバー募集、何を栽培するかを相談して決定  
 子育て中の親子30世帯にアンケートを実施、農業体験の内容など希望をヒアリング  
 合鴨農法で米作りにチャレンジし、それを最終商品化する

2025年4月～6月中旬

合鴨農法で米作りをすすめるべく、圃場を畑エリア・田んぼエリアに区切り、波板と木杭で水を貯められるよう田んぼを作る  
 →粗起こし→施肥→田起こし→水入れ→代かき(トラクターが代掻きで動かなくなったため、途中から手作業する)

2025年6月21・22・28・29日

4日かけて手分けして田植え(約400㎡を昔ながらの方法で全て手で植える)



\*小さな苗をそっと植える。

2025年6月25日

合鴨のヒナが少し大きくなるまで各家庭で10日間保育スタート(水鳥とはいえ、産まれたては溺れるリスクがあるため)、この間に稲の方も根っこが活着して、合鴨と共存できるようしっかりした株になる。

2025年7月6日

合鴨の水田放飼（田んぼに合鴨を放し、雑草や害虫を食べてもらうため。）



\* 水田放飼の前に合鴨小屋を手作り



\* 各世帯の合鴨を水田に放す

2025年7月～9月頭

プロジェクトメンバーが交代で合鴨の餌やりや、田んぼの水管理、追肥・草刈り作業にあたる。

2025年8月下旬 出穂

2025年9月4日(木)、7日(日)

稲が出穂し、だいたい穂が出揃ったので、2日に分けて、肥育のため合鴨を丹波篠山の農家に預けに行く。  
と殺・解体も依頼。

2025年10月11日(土)・12日(日)、～10月25日(土)・26日(日)

稲刈り（昔ながらの手刈り）、稲架掛けして天日干し



\* 根元から鎌を使って収穫します



\* 一束ずつ脱穀機にもっていく

2025年11月29日(土)・30日(日)

昔ながらの脱穀作業を学ぶ。すべて手作業で脱穀するのは大変なので残りはコンバインで脱穀、機械で粃摺り



\* 手作業の100倍効率いい！機械で脱穀



\* もみすり機も機械で。

2025年12月28日(日)

稲わらを使い、オリジナルしめ縄作り教室

メーカーに来てもらい、オリジナルポン菓子を製造(玄米・白米)



\*ポン菓子を初めて叩く。緊張の瞬間



\*収穫した稲わらでお正月のしめ縄づくり

2026年1月10日(土)

オリジナルのパッケージをデザインし商品完成

2026年1月11日(日)

堺のファーマーズカフェ MOZU にて販売体験させてもらう

### 3. 課題分析や今後の発展性

#### ◆活動の継続を支える資源確保の難しさ(運営面の課題)

本事業は、子どもたちに「農から食まで」の本質的な体験を提供するため、合鴨の飼育管理や手作業による農作業など、多くの手間と時間を要しました。

収支面では、助成金50万円に対し、教材費や加工委託費などの直接経費が上回る結果となりました。非営利活動として質を維持しながら、次年度以降の活動資金(自己資金)をいかに確保し、参加者の負担と教育的価値のバランスを取るかが大きな課題です。

#### ◆「命の循環」を伝える教育的アプローチの深化(教育面の課題)

合鴨農法において、稲を守ってくれた合鴨を最終的に「食材」として向き合うプロセス(と殺・解体依頼)は、子どもたちにとって極めて重要な学びの機会でした。

この「命をいただく」という重いテーマに対し、各家庭や参加した子どもたちの心の動きに寄り添い、単なる体験で終わらせないための事後学習やフォローアップの体制をさらに充実させる必要があります。

#### ◆地域コミュニティを基盤とした「キャリア教育」の定着

1次産業×2次産業×3次産業までのプロ(農家、デザイナー、販売店)が子どもたちと伴走する本モデルは、学校教育だけでは得られない「社会と接続した学び」として非常に有効であることが実証されました。

今後は、この「キャリア教育×6次産業化」の枠組みを地域のスタンダードな学習プログラムとして定着させ、自治体や学校、地域住民が一体となって子どもを育てる「地域支援型農業(CSA)」の実現に繋げていきます。

#### ◆未利用農産物の活用を通じたSDGsの自分事化

規格外品などの未利用農産物を自分たちの手で価値ある商品(ポン菓子等)に変え、消費者に届ける体験は、子どもたちの「食品ロス削減」に対する意識を劇的に高めました。

この成功体験を糧に、今後は米以外の地域農産物にも対象を広げ、子どもたちが自ら地域の課題を発見し、解決策を提示できるような、主体性を育む「探究型学習」へと発展させていきたいと考えています。

#### 4. 代表者又は担当者からのひとこと

本プロジェクトは、単なる農業体験に留まらず、子どもたちが社会の仕組みを肌で感じる「生きた学び」の場を提供することを目指しました。

当初、トラクターの故障により泥まみれになりながら手作業で代掻きを行った際は、その過酷さに子どもたちの笑顔が消える場面もありました。しかし、自分たちで一羽ずつ名前をつけて大切に育てた合鴨が、田んぼの雑草や害虫を食べて稲を守ってくれる姿を目の当たりにすることで、自然界の共生関係を深く理解していく様子が見て取れました。

特に大きな転換点となったのは、出穂後に合鴨を農家へ預け、「と殺・解体」を依頼したプロセスです。可愛がっていた合鴨を食材として向き合うことは、子どもたちにとって葛藤を伴う経験でしたが、最終的に自分たちの手で収穫したお米と合わせて「ポン菓子」という形に昇華させたことで、私たちは「命をいただく」ことへの感謝と責任を学ぶことができました。

収支面では、教育的価値を優先した結果として経費が助成額を上回る形となりましたが、地域の方々の協力やファーマーズカフェでの販売体験を通じ、子どもたちが自信を持って自らの言葉で商品の魅力を語る姿は、何物にも代えがたい成果であると確信しています。

今後も、地域の未利用資源を教材に変え、子どもたちが「自分らしい人生の選択」をしていけるようなキャリア教育の場を、地域社会と共に育んでまいりたいと考えております。

最後になりましたが、本プロジェクトの趣旨をご理解いただき、多大なるご支援を賜りました阪神高速未来へのチャレンジプロジェクト様に、心より厚く御礼申し上げます。本事業を通じて子どもたちが見せた成長や、地域に生まれた新たな繋がりは、阪神高速未来へのチャレンジプロジェクト様のご支援がなければ実現し得ないものでした。

皆様のサポートのおかげで、子どもたちが社会と繋がり、命の尊さを学ぶ貴重な機会を創出することができました。この成果を次年度以降の活動にも繋げ、地域の未来を担う人づくりに邁進してまいります。